



キャンパス点描
—サクラスポーツ&ジムナスティクスセンター—



本誌第15号の「キャンパス展望」でもとりあげた第2体育館の取り壊しにともない、



第17号

2022年
6月25日発行

日本大学国文学会

同窓会誌



新たに3号館に隣接して建てられた学内最新の施設である。今年3月18日に竣工式が執りおこなわれ、正式にオープンした。建物の名称としては学内で一番長いのではない。内部はダンスルーム・多目的ルーム・演習室・体操場からなる。役割としては第2体育館の後継施設ではあるが、学生食堂の併設はない。

OB・OGだより

写真の魅力

金田（栗原） 芙久美

子供の頃からずっと写真をみるのが好きでした。学生時代のアルバイトといえば写真屋さんでしたし、就職先もそれに近い職種を探したほどでした。今では撮る側にもまわって写真を楽しんでいきます。最初のカメラは携帯電話、次にコンパクトデジカメ、昨年からは一眼レフに手を出し、本格的に学び始めました。

先日、実践講座に参加しました。講師と生徒が銀座の夜の街を歩きながら、互いに被写体となってカッコイイ写真を撮ろう、という目標を掲げての実習でした。撮影場所選びから、その場その場に応じたカメラのアングルや設定など、判断力と瞬発力が試されるだけに、技術と感性のフル活用の場となりました。加えて、モデルに指示を出すコミュニケーション能力も必要で、人見知りなどしている場合ではありません。撮影後には、皆で必死になつて撮った力作

を鑑賞しながら、課題を話し合うレビュー会に参加。これも次へ繋がる良い経験となりました。昨年受講した写真教室はオンライン授業だったため、同じ志を持った仲間たちと撮影をともにし、交流を図ることが、こんなに楽しく刺激的だとは思ってもありませんでした。この日の体験は、写真の新たな魅力の扉を開いてくれたように思います。

今後は、レタツチの楽しみ、飾る楽しみなどに、より多くの人に観てもらおう楽しみです。まだまだ世界は広がりそうな予感があります。写真とはこれからも長い付き合い合いになりそうです。

〔平成20年国文学科卒業〕

私と文学

許 藝涵

大学の学科を選ぶ時、私は迷うことなく国文を選びました。将来何を勉強したいか、かなり前からはつきりしていたからです。

初めて文学と出会ったのは物心がついてすぐの頃でした。それは、私を寝かせるために父がよく読んでくれた中国の民間物語『百鳥衣』という作品でした。貧乏で心が

優しい主人公は、悪い官僚に妻を奪われて、様々な困難を克服してようやく官僚に勝ち、妻を救ったという内容です。年代もわからない、挿絵もない古い本でしたが、話の一字一句から様々な風景が想像できました。文学作品を読むということは、まるで異世界への旅のようでした。

その後も文学に対する憧れは強くなる一方で、異国の文学にも興味を持ち、国文学科に進学しました。好きなジャンルはたくさんありましたが、研究対象には鴨長明を選びました。今でも書道の師匠に「外国人なのにずいぶん渋いのを選んだ」といわれますが、実は鴨長明の頑固さと純粹さに惹かれたのかもしれませんが。私も幼い時から頑固者で、勉強も好き嫌いが激しく、好きなことしかやらないタイプでした。成人してから柔軟性は身につけたように思いますが、大学院（平成30年修了）に進学してから鴨長明を研究し続け、相変わらず彼の一途なところに魅力を感じてきました。

社会人となった今、読書の時間は少なくなりましたが、鴨長明との縁を大切にしながら、これからも新しい文学との出会いを求めていきたいと思っています。

〔平成28年国文学科卒業〕

コロナ禍と新社会人

久保田 萌笑

この四月で社会人二年目となりました。仕事はハウスメーカーの営業職です。

振り返ってみると、就職二年目はとても長かったように感じます。それまでの学生生活とは大きく環境が変わり、体力的・精神的に疲労を感じる場面が多々ありました。コロナ禍での就職だったので、入社式や社内研修はすべてオンライン式で行われ、人との接触が絶たれました。こんな状況下では仕事の厳しさや楽しさなど味わるはずがありません。ただでさえ新しい環境に順応するのに苦労しているのに、同僚と親交する機会も奪われ、ひたすら画面に向かって研修を受けていたこの時期は、虚しさばかりが募ったものでした。

それも研修後には少しずつ好転し、営業職らしく、上司や先輩と一緒に仕事に向向くことも増えていきました。もともと人と話すことが好きでこの職を選んだのですが、ようやく自分らしさが発揮できるようになりました。画面の前で研修を受けていた三時間と、実際に出勤して働く三時間とはまったく違います。大袈裟かもしれませんが、

「人は一人では生きられない」という言葉を実感しました。コロナ禍を体験したことで、人と直接会って対話することの大切さにあらためて気付かされた気がします。

コロナ対策上の制約・制限も緩和され、人々の交流も活発化してきましたが、この当たり前のように思ってた交流こそ、人間関係にとって大事なことなのだと強く感じた一年だったように思います。

〔令和3年国文学科卒業〕

大学生活で得たもの

日高 吉人

通信教育部に入学したのは六年前の31歳の時でした。それまで文学とは無縁の仕事が続いていましたが、ふと思うところあって、大学へ進んで教員になることを決意しました。家系が教師だったことも意識しましたが、国文学専攻を選んだのは、読書が好きだという単純な理由からです。

入学当初は長らく勉強から離れていたせいか、どの講義も難しく思えたものでしたが、受講に慣れてくると、高校の授業とは違った作品へのアプローチが面白く、確か

な手応えが感じられるようになりました。教職や専門の科目が増えた二年生になって、後に卒論の対象となる三島由紀夫との出会いがありました。とくに三島にしては異質の作品『命売ります』に興味を持ち、資料収集に努めるようになりました。一番苦労したのは、小説の初出誌『週刊プレイボーイ』と、三島の情報が多く掲載されていた『平凡パンチ』の二つの週刊誌を徹底的に調査することでした。主に通った国会図書館は閲覧の時間や冊数に制約があり、やりくりが大変でした。数少ない先行研究に関しては文理学部図書館に助けられ、同時に先生の指導も受けながら、何とか私なりの卒業論文を提出することができました。

やや遅れての大学進学だったので、不安はありましたが、良き友人や先生に恵まれたお蔭で卒業まで漕ぎ着けました。一人では不可能だったと思うので、あらためて人との繋がりが大切なのだということを強く感じています。

〔令和4年文学専攻（国文学）卒業〕



わたしの仕事

アンティークショップ経営



INSTAGRAM @kasumi.antique

大学四年の春、伝統工芸などの手仕事に関心があった私は、地元台東区にある銅器の工房へ職場見学に行った。そのことが自分の人生を大きく変えることになった。

その工房の職人から木工家具を扱う仕事を勧められたのだ。もともと趣味で木彫り制作に取り組んでいたこともあって、漠然と伝統工芸か木工の仕事に就きたいとは思っていた。そこで、木工家具に関わる仕事を探し、その年の秋、日本のアンティーク家具を販売する店で働き始めた。

その店は明治から昭和初期頃の古い家具を中心に、古道具や民藝品など幅広い古物を扱っていた。私は少しずつそうした古物の魅力にのめりこみ、入社から二年後には店長になった。競り市場での仕入れを含むすべての業務をこなした。自分の仕入れた物が売れていくというのは充実感があり、毎日が楽しく、勉強にもなった。しかし年を重ねるごとに、人気のある家具だけを仕入れて売り上げを延ばすことに嫌気がさすようになっていった。やがて、本当に好きな古物だけ売りたい、という気持ちに変わり、七年目に独立を果たした。

開業にあたっては、魅力ある古物を後世に残す仕事をしたいという気持ちが強かった。家具だけでなく、骨董品や古道具といった様々なジャンルのものを扱い、一つ一つの品物を厳選して仕入れ、その来歴や機能美などを丁寧に説明して販売することをコンセプトとした。

しかし、開業当初の収入は、会社で働いていた頃に比べても遠く及ばず、仕入金にしても存分に活用できるほどの備えもなかった。最初に思い描いていた通りの形にすることがどれほど難しいかを思い知った。独立して二年目以降はSNSによって

徐々に店の存在が知られるようになり、また、海外のECサイトで販売を始めたことで、外国からの問い合わせも増えた。自分が納得して仕入れた品物を喜んで買ってもらえるのが、一番やりがいを感じるポイントである。たとえば、明治時代の木箱の蓋があった。ただの蓋だが、表面に張り付けられた和紙の色褪せた雰囲気魅力的で、これを購入したアメリカ人から、唯一無二の美しさだ、という共感のメッセージが届いた。この時ほどうれしかったことはない。

安定した会社勤めを辞めて、独立開業を選択したことに後悔はない。リスクもあるけれど、自分らしく働ける自由度の高さや購入者に喜んでもらえた時の充実感や達成感というものは何ものにも代えがたい。辛く苦しいことがあっても、この仕事が嫌になったことは一度もない。むしろ好きな仕事をずっと続けていられる幸福感が今の活力の源泉になっているように思う。

霞 健吾 平成元年3月5日生まれ。同24年3月国文学科卒業。卒論は町田康『パンク侍斬られて候』について執筆。令和元年、奥浅草に位置する台東区千束にてkasumiをオープン。

HP [kasumi] <https://ka-su-mi.jp/>

談話室

君にはすでに大いに迷惑が掛けられている……

飛鳥 勝幸

編集者の常套文句「けっしてご迷惑はお掛けしません」とつい声に出してしまい、しまったと思った瞬間、厳しい言葉と視線を浴びてしまった。背中に汗が噴き出す。しばしの沈黙の後、ふつと笑った表情に救われた。お引き受けいただけ！ 現代詩歌の大事典企画、監修者交渉時の一コマである。今まで数多くの書籍を担当させていただいたが、一冊ごとに忘れられないドラマがあり、公開できない失敗談も多い。

さて、この度、二〇二一年度「出版文化研究」科目を実務経験者として担当させていただくことになった。選択科目で単位は二単位、対象は二年生から四年生である。国文学科生が中心だが、中文・独文・社会学科の学生も受講した。新型コロナウイルスの終息が見えない中、すべてオンライン、Zoomを利用した双方向での授業となった。通信容量の問題や初対面での恥ずかしさもある

のだろう、顔出しOKの学生はほばいない。モノトーンのパソコン画面に向かって話しているうち不思議な感覚になることがあった。何かが違う。思い浮かんだのはリアルな「編集会議」の場での「体温」「熱量」、そして「匂い」のようなものである。

編集会議の多くは今後オンライン中心に進むだろう。だが、リアルな場での声のトーン、ふつと見せる表情、ちよつとした仕草や癖、座る姿勢などから、出席者の体調や進行上の不満、そろそろ発言をいただけるかなども察知できた。また、お弁当を食べるときや雑談の中で、新機軸を発見できたり、問題点の解決策に繋がったりすることも多い。大学の授業に必ずしも求めるものではないだろうが、ここには漂う体温がある。マスク越しでも顔出ししていただけると嬉しかったのは、眼を見つめて話しているだけでも体温が上がったように感じただけである。

科目「出版文化研究」をひとつくりに説明するのは難しい。身近な素材から出版に通底する様々な事象を見ていくが、授業で学生に与えた課題の一つに「自分が期待する読者像と著者像」がある。少し難しい課題だったが、例えば第三者目線、アイディ

アのストック、作家を育てる心、情報を変換させる力、情報の引き出しの多さ、言葉の真意を崩さないこと、本の完成像をくみ取ること、可視・不可視の調整といった解答が並んだ。ここでは学生に受け手側と送り手側の両方を当事者目線で考えてもらった。SNSや様々な媒体を使い誰もが簡単に表現者になることのできる現在、人に伝えたい熱量、自分が知りたい熱量を感じ、相手に興味を持つことも大事であろう。

さて、冒頭のやりとりをした先生は批評家のO先生である。今日では古臭い方法かもしれないが企画要旨を簡略にまとめ、手紙を書き、返信用ハガキも入れ郵送した。が、予想どおり断られる。後日再度手紙を書き、到着日を予想しお電話をした。何度かのやり取りのあと、「二〇分間だけお時間をいただきたい」という必死さが喫茶店での面会に結び付いた。確かにしつこいのは事実である。だが、ここには参画していただけなければ企画自体が消滅してしまうといった強い思いがあったかと思う。

緊張して脇汗をかいた今回のオンライン授業、私の体験談を含めた「体温」「熱量」は、はたして学生に伝わったのだろうか。

〔国文学科非常勤講師〕



詩の魅力に触れる

福尾 晴香

読

書

案

内

詩は言葉の豊かさを存分に味わうことのできる魅力的な文芸ジャンルである。今回はそんな詩の世界を紹介したい。

谷川俊太郎の詩集『詩に就いて』（二〇一五年、思潮社）には、息を吸って吐くように詩を書き続けてきた詩人の言葉が詰まっている。「中指がタッチパッドの上を滑って行って／文字を捕まえる 一つまた一つ／身の回りのほしたない彼の畑から／かぼそい茸にも似た詩が生えてきている」。詩集には、ほんの些細な日常の閃きで書かれた言葉が並んでいる。完成された詩ばかりでないがゆえに、むしろ詩について、死や人生について垣間見える谷川の日々の思考に引き込まれてしまう。

平田俊子の詩集『戯れ言の自由』（二〇一五年、思潮社）は読むと思わず笑顔になる。平田の言葉の軽やかさと批評性は他にはない。「震えていると／人という字を手ひらに書いて飲み込むといふ」と／古典的なおまじないを教えてくれる人がいた／緊張のあまり／間違えて／犬という字を書いて飲み込むと／ふさふさの尻尾がのどにからまった。まさに言葉遊び（戯れ言）で書かれた詩であるが、読むと本当に犬の毛がのどにからまったような感覚になる。言葉から喚起されるイメージと身体感覚が一体になった平田の世界がくせになる詩集である。

三角みづ紀の詩集『はこいり』（二〇一〇年、思潮社）は、目に映る景色や心の揺れを細やかに描き出した

逸品である。「存在するために／あなたたちは／植物をふみ／形跡をたどり／一本の道をつくる／その道は脈拍でうめつくされる」。ふまれて壊されていく植物の姿とその上を歩く生き物の脈拍、あるいは立ち上がるうとする植物の息遣いが表現されている。しかし、これは比喩である。微細な視点から、事物の「存在」を問う三角独自の哲学がふんだんに詰まったこの詩集は、日々のなかで忘れがちなたしちの生きている身体や周囲の人々とのつながりを改めて感じさせてくれる。

大崎清夏の詩集『指差すことができない』（二〇一四年、青土社）には、人や事物とのささやかな、しかし深い関係性が描かれている。大崎は最近『踊る自由』（二〇二二年、左右社）を刊行し、そこでも「あなた」や「私」という人称を用いて繊細なコミュニケーションを描き出した。とくに、前者の詩集には記憶をめぐる言葉が豊富である。「波にさらわれたりして／いいのも嫌なのも景色をいっばい見覚えて／私たちはまだ死なないで生きています」。東日本大震災から間もない時期に書かれた言葉には、時代や国を超えて、人々が置かれている現在が映し出される。何より、海や空、丘といった風景描写に優れていることも大崎の詩の特徴である。

日常の言葉に飽き足りなくなったとき、これらの詩は新たな言葉の魅力に気づかせてくれるだろう。

〔国文学科助手〕

国文学科ヒストリー ①⑦

【国内外の動き】

年頭より米海軍・原子力空

母の佐世保寄港を阻止する運動を契機に学生

運動が本格化。二月には東大医学部の無期限

ストライキを発端として東大闘争が始まった。成田空港の建設問題をめぐる三里塚闘争も激し

くなり、デモ隊と機動隊の衝突がくりかえされた。四月、東京国税局が日本大学の二〇億円もの

使途不明を摘発。五月から半年以上にわたる日大闘争が始まる。テレビではアニメ『巨人の星』、

ワイドショー「三時のあなた」、歌謡番組「夜のヒットスタジオ」が放送開始。『ビックコミック』

『少年ジャンプ』の創刊もこの年のことである。同時にレトルト食品「ボンカレー」や即席麺「出

前一丁」「サッポロ一番」が発売された。他方、一〇月には川端康成が日本で初めてノーベル文

学賞を受賞。同月、国際反戦デーに合わせて新左翼系活動家による新宿騒乱事件が起きる。一二

月には府中で三億円強奪事件が発生。騒然とした一年であった。

【学内外の動き】文理学部の学生たちも日大闘争に呼応。五月には全学共闘委員会に参加し、学

部内で八千人の集会と抗議活動が展開された。六月にはストライキに突入。正門にはバリケード

が築かれ、授業実施は不可能になった。八月、一三時間にわたる学部大衆団交が行われ、学生指

導担当が辞任。九月、古田重二良会頭を四万人の全学部学生が囲んだ大衆団交が開かれたが、こ

れに対して佐藤栄作首相が介入。学生たちの怒りが沸点に達したが、同時に学部内では授業再開

への模索が展開されていた。

1968年(昭和43年)

- 2月 金婚老事件。
- 3月 『語文』第28輯を刊行。
- 4月 鈴木知太郎教授が文理学部長に再選。
- 5月 パリの学生・労働者によるゼネストが決行。五月革命と呼ばれる。
国文学会評議員会開催。
- 6月 『語文』第29輯を刊行。
学生運動が激化し、文理学部でも学生のストライキが始まる。
国文学会総会は会場を櫻丘高校図書館に変更して開催。
- 8月 ソ連などがチェコに政治介入(チェコ事件)。
- 9月 『語文』第30輯を刊行。
- 10月 明治百年記念式典が開催。
- 12月 鈴木知太郎教授、学部長を辞任。金子義夫教授が学部長代行に。
『語文』第31輯を刊行。



田中ゆかり (日本語学専攻) 研究室

研究室訪問 一問一答

- ①この道に進んだきっかけを教えてください。
井上史雄編『《新方言》と《言葉の乱れ》に関する社会言語学的研究』(1983)を読んだこと。
- ②好きなラジオ番組は何ですか。
世界の快適音楽セレクション (NHK・FM)
- ③ギャグマンガのベスト3をあげてください。
江口ひさし「進め!パイレーツ」、鴨川つばめ「マカロニほうれんそう」、魔夜峰央「バタリロ!」。
- ④頭がごちゃごちゃした時の処方箋は?
ファジル・サイ(pf)のバッハ「シャコンヌ」の無限ループ。

掲 示 板

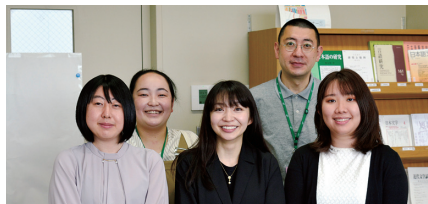
国文学科短信

令和3年度の国文学科の学位記伝達式(3月25日)はオーバルホールにて開催された。出席者数は昨年度を上回った。

新学期は2年ぶりに対面式授業(一部遠隔式)に改めてスタートした。感染症対策をとりながらも学内は活気を取り戻しつつある。

昨年9月20日に津金孝邦先生が逝去された(享年92)。1981年から18年間、教職科目の書道を中心に学生指導にあたられた。

紅野謙介先生(近現代文学)が退職、この4月からは特任教授として講義を継続担当中である。新たに堀井一摩先生(近現代文学)が専任教員として着任。さらに荒川真一助手と大西真央助手が退任し、徳本善彦助手と杉本なつみ副手がそれぞれ着任した。次に現在の研究室スタッフの皆さんを写真紹介しておく。



国文学会大会案内

今年の大会は7月9日(土)に対面およびオンラインのハイブリッド式で開催します。概要は下記の通りですが、詳細は国文学科サイトの「お知らせ」をご覧ください。

- 12:15 評議員会
- 13:30 開会の辞
- 13:40 研究発表
 - ①堀井一摩(文理学部准教授)
 - ②徳泉さち(文理学部准教授)
 - ③野田尚史(文理学部教授)
- 15:30 休憩
- 15:50 講演:西成彦氏
- 16:50 総会
- 17:30 閉会の辞

大会参加に際しては、対面・オンラインの参加方法の選択など、事前に指定フォームからの申し込みが必要です。フォームのURLは事務局からの案内もしくは学科サイトでご確認ください。入力締切は6月25日(土)です。

下高井戸・桜上水界限

2013年着手の笹塚駅から仙川駅までの約7.2km区間の京王線高架化事業が進行中である。完了時には25の踏切が解消するという。下高井戸駅・桜上水駅ともに高架駅となる。

同窓会員募集のご案内(郵便振替口座 00180-3-11183 日本大学国文学会)

国文学会では国文学科の卒業生(大学院・通信教育部を含む)を対象に同窓会員を募集中です。学会行事へ参加していただけるほか、機関誌『国文通信』を年2回お届けします。会費は郵便振替にて1,000円(2年分)から。振込用紙に卒業年次と「同窓会員入会」と明記してご送金くださいれば手続き完了です。国文学科サイトにも詳しい案内記事を掲載しています。

第17号

2022年
6月25日発行

日本大学文理学部国文学科
国文通信編集委員会
〒156-8550
東京都世田谷区桜上水3・25・40

国文通信編集委員会
紅野謙介・鈴木功真・竹下義人

◆第17号をお届けする。どのコーナーの文字数も自由のびのびと書いて頂けるだけの余裕がなく、今回も執筆者の皆さんには不自由を強いることになった。ご協力に感謝申しあげる。◆新学期から一部を除いて対面式授業へと切り替わり、全員マスク着用の教室風景にも慣れた。二年間自宅から遠隔講義していたことを思うと、ようやく現実に戻ったような感覚がある。オンライン式経験のメリットの一つは、印刷所とのやりとりを含めたすべての編集作業がメールだけでこなせるようになったことか。(義)

編集後記

本誌では皆様からの投稿を随時受け付けています。エッセイのほか、同窓会の案内や報告なども歓迎します。詳細は本誌編集委員会宛、お問い合わせください。
電子メールは国文学科サイト内に設置してある「お問い合わせ」フォームから送信できます。感想などもお寄せください。